

〈研究〉那須扇状地の開拓村

島村, 勇二

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

58

(終了ページ / End Page)

61

(発行年 / Year)

1956-05-01

那須扇状地の開拓村

島村 勇二

(1) 殿様農業のあつた食しき開拓村

那須野ヶ原の開拓村は、北関東における低位生産地帯として知られ、その開拓は、明治維新後、中央政府、維新の元勳、等の懸念する努力にもかかわらず、食しき村：と云うことで良く人々に知られている。中央に近いという位置を占めるが、今日なお低位生産地帯という地理的特性は、如何なる経済社会的諸条件や、自然的諸条件に存するものであろうか。

(2) 畑作地の多い開拓村

昭和25.8.1、センサスによれば、山林、荒野が多く、耕地率は約27%にすぎない、更に耕地中に占める水田率は極めて少なく、北関東畑作地帯内においても、典型的な畑作地帯といえる。農業生産の進化を商品生産の浸透程度を示めず、農業経営方式と土地利用に存する、作物構成を見るとつぎのとおりである (オノ図)

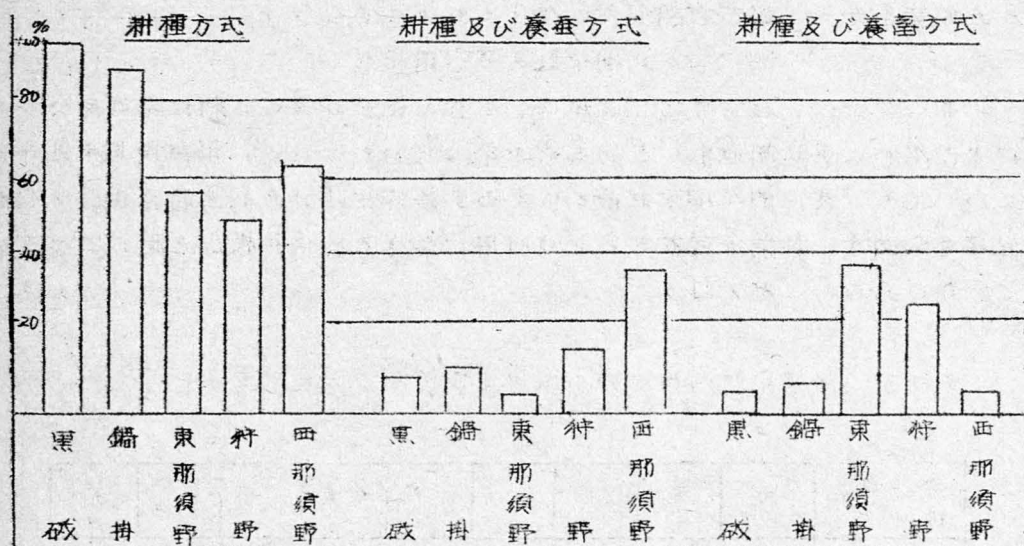
オノ表 那須扇状畑作地帯の作物構成 (25.2.1 世界農業センサス)

作物 村別	稲	麦	雑穀	豆類	芋類	蔬菜	工業	飼料 作物	その他
鍋掛	4.5.4%	71.1%	41.2%						
黒磯	83.8%	62.1%	47.9%						
東那須野	73.1%	70.6%	56.7%						
	52.9%	53.7%							
	35.3%	64.5%	92.1%						

当地帯は、主要作物として、米、麦、雑穀が支配的で陸稻、玉蜀黍の作付を基幹としており、加えて商品作物たる煙草、または桑が組合されどさい、榨油、工業原料、果樹等の一般的商品作物の作付は甚だしい。また経営方式においては（オマ図）大部分が耕種方式で、耕種と養蚕の結合が、耕種と家畜の結合で見られる。従つて、単一商品生産型ではないが、その複合程度が弱く、そして畑作経営が中心であることは、一般に、日本において畑作農

オマ図 経 営 方 式

22. 8. 1 農業センサス



業経営が、水田農業経営に比較し、技術水準、及生産力の立遅れが問題になる如く当地帯においては、こうした事情が更に土地の低位生産力に原因し、その経済力の食困とを示めしていたのではなからうか。

(3) 開拓地と食乏な村との関係

那須野ヶ原の開拓村は、開拓地なるが故に食乏だという考え方が信じられていた。開拓地 = 食乏村 とは一体どんな関係があるのか

いわゆる維新の元勳ともいふべきお偉方に養育され、当時、文明の開拓という思潮に乗り、ここに大農場が建設され劃期的な農業経営が実施されたがこれは不成巧に終り名刺だけの大農場で後には小作農地に変化したのであつた。直接開拓民は、生活の困窮者で、火山灰地、酸性度の強い、ヤセ地に、やつと雨露を防ぐ小屋で、過重労働に耐えていつたのである。

要するに開拓地と開拓民の斗争の過程から指摘されるものは

1. 開拓以後の日本の発展期にありながら困難な事業であつた。

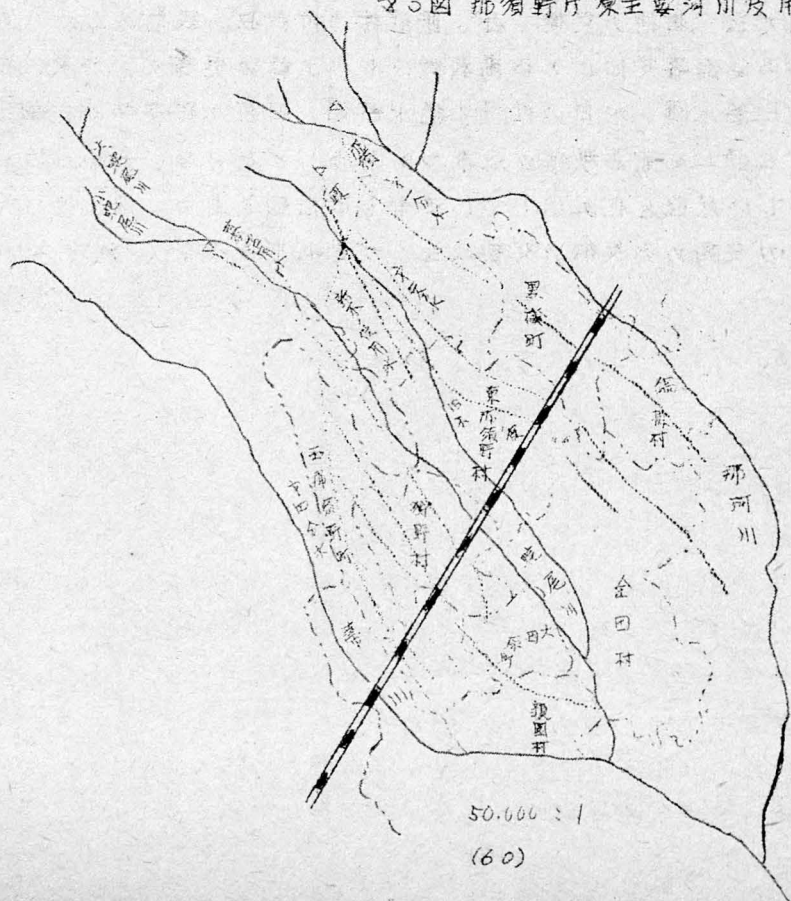
コ、農業の資本家経営が芽生えつつも崩壊していった。

3. 畑作農業から水田農業へ移行していった。

これらについて具体的に、しかも定量的に追求せねばならぬ。だが、ここにおいては論ずる余地がないので省略する。しかし評される範囲に於いて述べて、

(1)、(2)については、いかに日本農業の発展過程に対応して、開拓進出が具体的に遂行されたものである事を究明せねばなるまい。ともかく調査の結果、いい得る事は、貧しさ村が、偶然にしかも自然の不利が縁に形成されたのではない。特権階級の地主的土地所有の下に、余りにも資本力の乏しい農民、離村を余儀なくされた農民が逆立ち開拓していた。当初は、開拓の仕争よりむしろ賃金労働に主体がおかれ、開拓農民でありながら農業労働以外の金に生活の糧を求めねばならず、従つてきた永住の道を失ひ他に転出して行つた人々もかなり多い。また中には、農業に専念しても、その收穫物の少なさに驚いて断絶した人々もあつた。かくて、開拓地の農業は、全生命をかけた開拓農民の努力にも遅々として進行しなかつたのである。

女3圖 那須野川主要河川及用水路分布圖



(4) 畑作農業から水田農業への転換

上図に見られる如くハート型の扇状地表面に幾條かの用水路が通っている。これらの用水路こそ、この開拓地の人々に飲料水を与え、草木に生氣をもたらしただけである。特に用水路の重要な意義は、水田農業の樹立にあり、この水田農業の立地こそがこの開拓事業を押し進め、農業を安定せしめて行つたのである。また用水路の開通は、地下水の増強をもたらし、戦後は食糧事情の窮乏化、米価の騰貴等に原因して電気揚水機による開田事業が進められ、土地利用の差は全く一変しつゝある現状である。

(5) 開拓農民の表情

部落に入つて気づく事は、まず、開拓地＝食乏という事は当らないことだ。だが、開拓農民の大部分の人々はそれを感じていない。かつて、開拓民が、旧村から、荒れ者、他所者、三本指、カのない人間という様々な差別が、開拓民を卑屈者に仕上げ、結びつく経済的低くさに憤慨させているように見える。だが先程も考慮した如く電気揚水に伴う開田の進行が、部落内に新しい方向を住み出している。戦後、農地改革の不徹底が、藩尺分解を住み、更にそれが、開田を通じて変化されているように見える。

例へば、開田方法、耕地の交換割合、採草林の所有権、技術のちがひ等々を通じてである。部落共同による揚水救済も、出資の程度が、給水、田の大小となり、更に給水量、水田の位置、給水時間、田植の順序等々、細かなところまで、水を通じて部落秩序が出来つつあることである。勿論、新しい村の方向は新しい意識を住み出している事も皆指し出せる。例えば、共同耕種とか、生産力を高める技術の交換とか、がそれである。(1956.4.14)